

## 宿場町寸話

### 4. 枚方宿の防御的構造(2)

2024年4月2日

堀家 啓男

#### (1) 婉曲に反った道、鍵の手の道

それぞれの見附から進むと、その往還筋は婉曲に反っています。西見附から堤町を通り泥町にいたる道は右回りに反っており、次に宿役人、木南邸の角で北方向へ大きく逆「く」の字に左折しています。東見附から岡新町村を経る道は左回りにやや反っており、また岡新町村はずれの中川橋(のちの枚方橋)で大きく逆「く」の字に左折し、さらに岡村の宗左の辻では、大きく「く」の字に右折しています。本陣や問屋場をはさんで街道は東西ほぼ対照に「く」の字に屈曲しているのです。また本陣までの街道は上空から見ると、蛇の背骨のように蛇行しています。いずれも本陣や問屋場への遠見遮断の備えです。この形をみれば、西国に対する重要街道にある枚方宿内道路として、計画的に本陣や問屋場を配置した整備がおこなわれたことは推測されます。

#### (2) 本陣の位置

本陣の位置は枚方浜から至近にあります但淀川本流には接していません。これはたまたまでしょうか。京阪間の中間に位置し、淀川舟運の重要拠点である枚方浜を戦略において本陣の位置を

決めたのではないかなと想像できます。

幕末、鳥羽伏見戦争の最終局面で征討大將軍小松宮彰仁親王は淀川を船で下り、本陣近くの鶴屋浜に上陸、ここより大坂に向けて進発されました。

#### (3) 浄念寺門前は典型的枡形

泥町村から三矢村に入る浄念寺の門前では直角に2度曲がる枡形が築かれています。枡形は四角、又は直方体のことです。城では城門と城門の間につくった広場のことを言い、城内に侵入した敵を阻止し、城門から逆襲できるようにしたものです。枚方宿の枡形は、本陣より大坂方で設置されており、その理由としては西国の大名に対して、遠く江戸の防御をも視野においていたでしょう。枚方宿の枡形は浄念寺門前の空間に直方体をはめることができそうなほどははっきりしています。現在も昔の町並みが残る関宿や土山宿をみてもこれほどの枡形は見られません。いざ紛争となれば、浄念寺の築地塀を活用し、敵の攻撃を防ぎ、逆襲できそうな感じがします。これも本陣や問屋場の防御的機能であるとともに、京坂間の重要拠点として、西国大名への江戸防衛の機能も備えさせた配置と枡形と推察するところです。

#### (4) 筋違いの道

街道に横付けする道は、枚方村から街道に入る道や札場の辻のように十字路ではなく、横断できないようにされています。浜や街道裏への道は、すこしずらして設けられています。いわゆる筋違いであり、このことは宿外の村から、不審者が宿に入りにくくすることや浜からの上陸者も街道を横切れないということで、行軍である大名行列の隊列をみだすことのないよう安全を図ったものと思います。

#### (5) まとめ

枚方宿ほど鮮明に、宿場町としての防御的特徴を残した往還筋は珍しいのではないのでしょうか。さらに宿創設のころの政治的環境を反映し、豊臣方や西国大名に備える軍事的構想をもって宿の設置に着手されたのではないのでしょうか。残念ながら、枚方宿の民家は建て替えられ、町並みはどんどん変わりつつありますが、往還筋は幸いにして大きく変わっていません。

# 浄念寺前の「ます形」



にし みつけ  
**西見附**

江戸時代を通じて多くの旅人が枚方宿を  
行しましたが、時には外国人の旅行者が、  
方宿のことを記録に残しています。ケンネル  
申維翰、ツンベルク、シーボルト、アーネ  
ト・サトウなどです。大坂・京都間のほぼ半  
ばにある枚方宿では、休憩・食事をとること  
が多かったようです。

彼らのうち、枚方宿の様子を詳しく記して  
いるのは、ケンネルとシーボルトです。兩人  
ともドイツ人で、オランダ東インド会社の商  
館長の江戸参府に医師として随行しました。  
シーボルトは「枚方の環境は非常に美しく、  
淀川の流域は私に祖国のメインの谷を思い出  
させるところが多い」と想起しています。

**現在地**

市立枚方宿歴史資料館  
浄念寺  
浄行寺  
浄行堂  
浄行庵  
浄行軒  
浄行亭  
浄行楼  
浄行閣  
浄行殿  
浄行堂  
浄行軒  
浄行亭  
浄行庵  
浄行楼  
浄行閣

歴史街道

市立枚方宿**鍵屋**資料館 →